

昭和六年を行く

大正十二年の大震災後に我が工事畫報が創刊されて以來將に七年になります。幸に先輩各位の指導を得て我國の工事技術界の爲め全努力を捧げて來たのであります。然し我が工事技術界の前途は尙ほ實に遼遠であります。數年來の大工事が完成したからとてそれで終つたのではありません。まだ我々の前途には十年、二十年の大工事を多數に控へてゐるのであります。

世界的の經濟不況も漸く落付いて來ました決して悲觀すべきではありません。唯恐るべきは世間の人氣に捲かれて自分の職分を忘れてゐる事です。或は工事を輕蔑してゐる事です。若も工事技術家の一人づつが、自己の仕事に對して何事か一つ宛の發明又は發見をしたならば、日本の工事は如何に立派なものになるでしょう。實際工事位發明の餘地の澤山あるものは他にないのであります。唯稍もすると工事を平凡化し自分を無爲にし、自分の立脚せる使命を忘れてゐる事が何より恐るべき國家の損害であります。

昨年是我鐵道省の機關車修繕に關する技術者が露西亞に招聘されて非常な好成績を擧げてをります。此は明に新日本の國威を海外に擧げてをるものであります。然るに我が土木建築に關する工事技術のみは却つて米國から技師を迎へてゐるのであります。幸にして土木方面から岡崎文吉博士が支那の遼河工程局に、加賀山學氏が支那の膠濟鐵道に、鈴木氏が波斯の鐵道に招聘されてゐる事は幾分か心強い次第であります。此際我國の技術者にして腕に自信のある人は、支那、露西亞、南洋其他の方面に進出すべきであります。内地丈で満足してゐる様では到底大なる進歩は望めない事と思はれます。

工事技術界より輩出せらるゝ博士の數の少い事は、必ずしも學界不振の準據とはなりません、兎に角研究の少いと云ふ證據にはなりません。我々は新博士の出現を待望して止みません。

昨年十一月の伊豆の大地震は、あれが都會地であつたら如何に慘憺たるものでしょう。此丈け狭い國で此丈け頻々と地震に襲はれます、此等に對する工事研究も前途尙ほ幾多の問題が在ります。特に緊要なるは基礎工事と、混凝土工事と鐵骨工事とであります。

一方工事請負業者の方を見ましても、昔の様に權謀術數のみでは成功しません。奇策縱横も必要かは知れませんが、結局は工事施工の實力であります。近年業者が優秀なる工事技術者の養成を目的とし、或は材料工法等に就て常に考案を盡しつゝあるは喜ぶべき現象であります。

特に最高學府にありし佐野利器博士の如き權威者が、自ら業界に入り技術實行に努力せらるゝに至りし如きは、學界と業界との一大覺醒であります。斯る事象は今後益々我國の工事技術界を實力本位に導くものでありまして、我々は斯界の爲に多大の欣快と光榮を感じるものであります。

昭和六年一月

工事畫報社同人

